

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	21世紀社会デザイン研究科	比較組織ネットワーク学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科・比較組織ネットワーク学専攻3年	坂巻 恵介 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科教授	萩原 なつ子 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科・比較組織ネットワーク学専攻3年	坂巻 恵介	
研究期間	2011	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

近年地域の公的病院の縮小や閉鎖が相次いでいる。その原因は絶対的、相対的医療従事者の不足、診療科の偏在、女性の職場復帰の難しさなど様々な要因が複合的に絡み合っていると思われる。この危機的な状況を抜け出すために、今ある医療資源を少しでも有効活用することで、この状況を打破する突破口を見つけることを研究目的とする。今まで続いてきた「患者は一方的に病院にかかる」という受身の姿勢を改め、各人が病院を支え、病院と共生する必要性を考えるべきである。地域住民である患者自身が地域の病院のために何か出来ないか考える必要があるといえよう。しかし一個人が病院の為に尽力しようとしても、あまりに漠然としていてそのきっかけを見つけることさえ難しいのが現実である。そのために有効活用するのが NPO であると考えられる。本研究の最終目標はこれからの公的医療を誰がどのように担うのかを明確にするものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[住民目線の医療の構築] [NPO と地域病院の協働] [地域住民の医療教育]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

[1] 5つのNPO団体に対して書面によるアンケート調査を行った。団体によって質問した内容に差異があるが、年齢、居住地、家族構成、職種、学歴などの基本情報のほかに5つの団体に共通して質問できた内容は以下のとおりである。

- ・ 本人もしくは家族が急な病気になった時に身近に相談できる相手はいるか？
- ・ 子供の人数
- ・ NPO への入会時期
- ・ NPO 入会のきっかけ
- ・ 過去から現在まで医療関係の職業に就いたことがあるかどうか
- ・ 他のNPO、もしくは何らかの社会奉仕活動を行う団体に所属しているか
- ・ NPO 活動を始めて感じたやりがいについて
- ・ NPO 活動を始めて自分にとってプラスになったこと
- ・ NPO ができる前と後で何がいちばん変わったかについて

結果を大まかに総括すると元々医療問題に興味があった者が意外に少なかったということだ。それまでNPOはもちろんボランティアにも参加したことがないものが多かった。地域医療を立て直そうとするNPOはごく一般の市民が医療という自身の生命に直結した問題を前にして、立ち上がるというケースが多い。西日本の地域医療を支えるNP02団体はともに子供を持つ母親たちによって組織されていたものであった。それまで自分たちが住んでいる地域が深刻な医療問題を抱えていることなど知る由もなかったという女性によって組織されたNPOであった。会員の中に占める医療従事者の比率も当初こちらが想定していたものよりも低かった。これは専門家集団による定点的な見方をする組織に対抗して、市民目線の提案を行なうという意味において非常に画期的であると判断した。またそこから見えてきたものは、住民は当事者になるまで自身の地域の医療に興味関心を抱かないということである。今そこにある地域の医療問題に対して多くのステークホルダーを巻き込むには草の根の活動が発端となる場合があることを物語っている。NPOが出来る前と後で何が変化したかという問いに対しては、行政の注目度があがったと答えた者が多かった。ここからもNPO組織は今その地域にある問題を「見える化」することが可能であるということ、NPOメンバー自らが実感として感じているということ、裏付けた形になっている。

[2] 千葉県NPO法人「地域医療を育てる会」へのフィールドワークを通しての考察

自治体がNPOに対して行なってくれる援助は何かあるのか⇒NPO主催の勉強会イベントの後援として市が所有している会議室などの場所を提供してくれる。しかし金銭的な支援に関しては全くないという。

しかし金銭的な支援を無理に貰おうとは考えていないという。そればかりかたとえ行政から資金援助があったとしても、NPOとしては受け取りを拒否する方針であるという。お金という縛りができることで行政側に良いように利用されてしまうのを避けたいからであるという意味もある。金銭的な直接援助は必要としないとしても、NPOとして行政に望むことは少なからず存在しているという。大まかな枠組みとなってしまうがそれは以下の通りだ。

① 2次医療圏計画を立てて遂行して欲しい。地域医療の再編を強く望む

② これらの情報を的確に住民に伝えて欲しい。

これがNPOが行政に望むすべてである。

行政は行政のやるべきことをしっかりやってくれればそれでいい。NPOの活動を支えて欲しいなどとは思わない。何故なら本来行政がしっかりしていれば私たちのようなNPOが存在する必要がないから。本来は地域医療に関する諸問題が解決されて、NPOが自然消滅することが望ましい状況であるというのがNPOの見解である。

それではNPOが行政を動かし、医療政策や施策に影響を及ぼすことを望んでいるかどうかという問いに対しては「行政を動かそうとは思っていない。行政はやるべきことを自分達で考えて着実に取り組んで欲しい」と答えた。

限られた予算の中で住民のニーズに対応すべく自治体病院は存在している。しかし病院自体にお金や人を独自の裁量で投入する権限が病院にはない。だから病院を所轄する行政の役割が重大なのだ。

研究成果の概要 つづき

「地域医療を育てる会」について

①情報発信は行っているが、受信にはそれほど力を入れていないように思える。発信をするだけではいずれその効果も薄れてくるのではないかと。情報は常に双方向性であることが求められる。一方通行の情報は経験の蓄積の面においても劣ると考えられるからだ。発信して受信し、それを基に発信するといういわば「情報のキャッチボール」が NPO には求められているのではないかと。そのことを藤本に問うと受信のために力を入れていないと言うことをあっさり認めた。あるとすればたまに行うアンケートと CLOVER への投書くらいであるという。これでは情報の双方向性は実現できていないように思える。ではそれを解決するにはどうしたらいいのか？藤本達もそのことは気にはとめてはいるが、具体的処置については考えていないとのこと。

現状を鑑みるとフィードバックされた情報が少ないことは NPO の活動にとってマイナスである。

②NPO 組織の役割分担について

NPO の代表が藤本であるという事以外明確な役割分担はできていない。

一応会計を大まかにやってくれている人はいるが、それ以外は特定の仕事を受け持っているわけではないのが現状である。

連絡先となる事務局すら存在していない。藤本曰くこの NPO はアメーバのような形だと評する。緊密な連携や連絡を取り合うのに必要な指示系統が一本化されていないのが現状だ。何か必要に迫られたり、問題が起こるとそのときに時間があいている人たちが仕事を分担してくれて対処している。またその時々で中心になって動く人が変わっている。これはガバナンスができていないことの現れではないかという危惧を代表の藤本自身も感じているという。私も藤本の意見に同感である。これまで大きな問題が幸いにも起こらなかったのもそれと無く見過ごされてしまっているのだろうが、組織としては脆弱かつ未熟であるとしか言えない面もあるのではないだろうか。

③構成について

この NPO 組織は現在 28 人。

かつて医療職に属していた人が 6、7 人いるがそれ以外の経歴は様々である。

今まで辞めていった人は何人かいるが、皆 NPO 活動以外の仕事が忙しく、周りに迷惑をかけるからという理由であるという。基本的にくるものは拒まずの精神で、NPO 法で禁じられている場合をのぞき誰でも入会可能であるという。

④後継者問題

この NPO 活動は藤本の働きによるものが多いという印象を持つが、藤本自身は積極的に後継者を育成しようとは思っていないという。もちろんその出現を藤本自身が妨げているわけではない。だが「出てきてくれればいいな」という程度の思いであるという。

⑤総評

この NPO が一番力を入れているのは「対話の場作り」であるという。医療者と患者の信頼を作る場を提供するのがこの NPO の使命であるという。患者が願うことを全部かなえるのが信頼ではない。医療の不確実性を受け入れるのが信頼関係である。

NPO はテーブルであるという事を藤本は強調した。医療者と住民、行政が話し合うための場であるテーブルなのだ。そういった意味ではテーブルは喋ってはいけないという思いもあると藤本は語る。

藤本にとって NPO とはどのような存在であるのかという問いに対しては以下のように答えた。

草の根活動で利益にとらわれない存在であるべき。NPO の良いところは賛成派と反対派が一緒になって自由に行動しているところであるという。これは企業とは違うところなのではないかと思う。様々な意見を持った人が同じ組織に存在していることが健全であると考えられるという。またそれこそがこの NPO が存続する理由であるとも語っている。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

今現在は特に予定しているものはなし